1 スポーツ中継と機器開発

正会員 遠藤 俊行†

キーワード

スポーツ中継機器、オリンピック、番組中継技術

スポーツ中継で、ハンディカメラが初めて登場したのは、1968年のメキシコ・オリンピックだった。バックパックを背中に背負い、フィールドを自由に動きまわられるワイヤレススタイルでのデビューであった。それまでのスポーツ中継では、カメラはまだ重く、長いレンズで遠くからの映像に頼らざるを得なかった時代、選手と同じフィールドに立ち、選手の表情をより近くで捉えられるハンディカメラの出現は、放送関係者にとって驚きの瞬間だった。

スポーツ中継の中でも特にオリンピックは、機器開発の歴史と言ってもいい。日本で行われたオリンピックをみても、東京オリンピックでは、日本で開発した2 IO (2管式イメージオルシコン) カラーカメラが開会式の澄んだ秋空を写し出した。このカメラは、本体だけで80kg。札幌オリンピックでは、FS (フレームシンクロナイザ) のない時代、各中継現場をショックなく結ぶため、ルビジウム発信器を使い同期を合わせる「多元ゲンロッシステム」が開発されている。ヘリ搭載の最新小型カメラのヘッド重量は20kg。

長野冬季五輪では、高速で最終コーナーをまわる選手と併走する「カーブトラックカメラ」、二人1組でタイムを競うスピードスケート、同時には滑っていない二人をパッチャルで対決させる「仮想対決システム」。氷の下に仕込まれ、スタートで力強く氷を蹴る音をとらえた「氷中マイク」、ハイビジョンのワイヤレスカメラ、がオリンピックで初めて使用されている。オリンピックは、世界中のアスリート達が、腕と技を競う場であるとともに、放送機器開発でも、競いの場であつた。

最近の中継では、陸上競技や水泳のスタート前、スタートラインに立った選手は、近づいてきたハンディカメラに

向かって手を振り、場内の観衆へアピールする。同時にテレビを見ている視聴者にも笑顔でアピールすると共に、自分自身の緊張感をたかめる道具にすらしている。サッカーの試合前、「国歌斉唱」では、ハンディカメラが選手の目の前まで近づき、国を代表して戦う選手達の緊張と息使いを伝えてくる。35年前に登場したハンディカメラは、今では各種スポーツの中で認められ、必要不可欠の機材になってきている。

レースを走り終えた選手は、大型ディスプレイに写ったリプレイを見つめ、観客と一緒に自分の走りを確認する。サッカースタジアムでは、得点の入った後、ディスプレイにリプレイが再生され、それを見た観衆がドッ沸く。カーレースでは、競技規則を変えてまで、車載のオンボードカメラを義務づけ、ドライバーから見た迫力ある映像をリアルタイムでみせてくれる。

このように、これまでスポーツ中継で開発されたたくさんの機器が、スポーツ競技にも利用され、選手の育成、戦術の理解などにも利用されている。

スポーツ競技をよりわかり易く見せるため、これまで多くの機器開発が行われてきた。コンピュータグラフィックスが著しく進歩する中、新鮮な切り口、新しい発想でスポーツ中継を、より一層盛り上げる機器の開発が待たれる。そして、その新しい機器が、スポーツを競う選手、競技関係者に認められ、スタジアムの観客たちにも飲ばれ、テレビを見ている視聴者にも支えられる。そのような機材開発を常にめざしたい。

(2003年4月28日受付)

†NHK 放送技術局 中継制作

"The Latest Technologies ; Abstract" by Toshiyuki Endo (NHK Broadcast Engineering Department, Tokyo)

えんどう としゆき
遠藤 俊行 1966年、NHK入局。中継制作技術を長く担当。ハイビジョン草創期にプロジェクトメンバーとして、スポーツ番組を中心に多くのハイビジョン番組制作に携わる。正会員。